

書 評

ドナルド・ケネディ 著

『大学の責務』

土持ゲーリー法一*

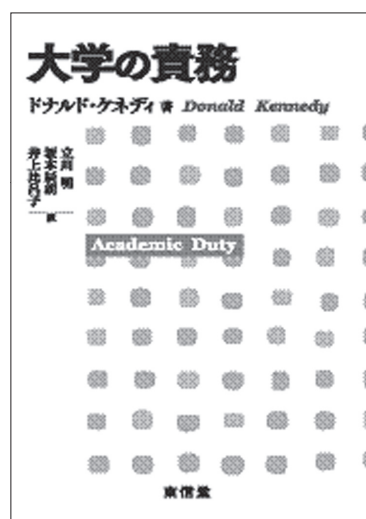
「説明責任（アカウンタビリティ）」の言葉を頻繁に耳にする。これは、大学教育に限定されたものではないが、長い間、大学が「象牙の塔」と呼ばれ、教育や研究が公にされることがなかったことから、大学は何をしているのかとの社会からの要請に対して、説明責任を果たすことが求められている。すなわち、大学とは一体何をしているところか、大学の責務を明らかにする必要がある。大学は一体、何をするとところかのコンセンサスもない。大学教員は「教育職」の俸給を受けながらも、研究第一主義で、学生への教育を「足かせ」と考えている教員も少なくない。学生の指導にしても、FD義務化でシラバスにオフィスアワーを明記することが求められると、学生がオフィスに立ち寄れない時間帯を設定する教員もいる。ましてや、大学の社会貢献など、「邪道」だと一蹴して、「象牙の塔」に籠もる教員もいる。

中央教育審議会は、『学士課程教育の構築に向けて』（答申）を2008年12月に発表した。そこでは、国際的に通用する学士課程教育の構築を目指している。日本の大学現状を国際的に比較すれば、その現状は悲惨たるものである。諸外国では、（大学・教員が）「何を教えるか」よりも、（学生にとって）「何ができるようにするか」に力点が置かれ、「学習成果」（ラーニング・アウトカム）の明確化が国際的な大学改革の流れであるにもかかわらず、最近の学生の学力低下に相まって、教員が「何を教えるか」により重点が置かれている。

日本の戦後高等教育改革のモデルとなったアメリカの大学では、教員は「大学の責務」をどのように果たしているのか、誰もが知りたいところである。その問題に正面からズバリと回答しているのが、本書のドナルド・ケネディ著『大学の責務』である。この英文著書は、アメリカで1997年に刊行されたものであるが、FD義務化された現在の日本の大学の教職員が果たすべき責務が、豊富な具体的事例として列挙されている。まさに、「目から鱗が落ちる」思いである。本書は、「依頼原稿」によるものではない。日米の高等教育に関心をもっている評者が目を通して、瞬時にして、必読書に値すると自ら買って新刊紹介したいと思った良書である。

以下に、本書の目次を紹介する。

- 第1章 大学の自由、大学の責務
- 第2章 準備する
- 第3章 教えること
- 第4章 研究指導すること
- 第5章 大学に貢献すること
- 第6章 発見すること
- 第7章 公表すること
- 第8章 真実を告げること
- 第9章 壁を越えた向こうへ
- 第10章 変革のために



* 弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室

各章の名称からも、大学の責務が具体的事例に沿っていることが明らかである。事例によっては、日本の現状と合致していないところもあるかもしれないが、比較教育学という視点から、そして将来日本も直面する可能性という視点からも重要であると思われる。

FDによる授業改善に関心をもつ評者は、とくに、第3章「教えること」から学ぶことが多かった。たとえば、著者も推奨するパトリシア・クロスが創案した「一分質問紙(ミニット・ペーパー)」である(109頁)。弘前大学でも授業が公開され、教員が授業の最後に、「一分質問紙」を利用しているのを見かける。これは、授業改善が目的であり、事後処理が決定的に重要である。そこでの結果は、次週に学生にフィードバックされなければならない。評者は、「一分質問紙」の方法は用いていないが、「講義へのフィードバック」という形で、学生の意見を授業改善に取り入れている。アメリカでは、“Learning from Students”という考えが根底にある。

「大学の責務」に関連して、評者は『ティーチング・ポートフォリオ～授業改善の秘訣』(東信堂、2007)を刊行して、大学教員の「教えること」の側面からの責務を明らかにした。日本では、まだ、導入されていないが、北米、とくにオーストラリアの大学では、新しい教員業績評価システムの構築として、「アカデミック・ポートフォリオ～教育・研究・社会貢献による総合評価」が注目されているが、本書は、大学教員の責務を「教育・研究・社会貢献」からも追求している点で見逃せない。

〔東信堂 本体 3,800 円〕